重修真書太閤記

二編 三

459
13

東海書籍目録

貴藩東叅太閤論藩全十冊

中泉丸茂

柳葉采原氏校訂

重修

眞書太閤記 二篇全十冊

東都書肆 知新堂

特へ13
門 5
號 459
卷 13

福

重修眞書太閤記二編卷之七

織田殿再度濃州へ出馬評定の事

并佐久間信盛洲の股ふ砦を築く事

織田殿運ふ乗じて強敵よ切勝國を平治しく大功を立
のへども猶私ふ〜ぶること成顯てさんゞ為密ふ上洛して將軍
御所へ參上し事の旨趣を言上しけるふ將軍その武勇を感で
あひ尾州の守護とふ〜のひ且御内慮を打あけられ年来乃
鬱憤ふ〜ふることを仰出されてやく〜天下静謐の計義を廻
らはでき由上意ありて万端首尾よく相濟歸國の御暇給り
しく信長大る面目を施し直ふ歸路よ趣きの此折〜濃州

同政會印

の齊藤家うてハ信長上洛のよ〜と聞くその留守を時と〜
尾州へ押寄清洲を攻取んう又ハ上方へ忍びを遣し〜
途中うてむとうふ信長を討く捨ぐやふど評義やら〜
ふ〜一決をぐれども信長成とるといふも真うて
相違ふ〜中ふ就く小牧源太ハ頻りふ清洲を攻取んうを
すゝめ野木治左衛門ハ上方へ討手を上さべ〜と云然れとも
野木ゞ計る処よ従ふとの多くべ大力量の士廿餘人を旅
商人よ作り形〜てとるく都へ上せ〜かども織田殿高運ふ
ま〜ふ〜仮ども左様の難よ〜らを丞とべ無事う歸國
まり〜ちらば野木ゞ謀遂に空〜なりてけり我れふのこ
ふべ尾州よ残り止ま〜木下藤吉郎濃州へ常ふ間者を

入置さふ〜よ謀ア〜ふ野木と小牧と不快まあり終よ
両人同志計〜て果くれゞ尾州へ軍を出ハふおりひもよ〜べ
なりにそり
小牧源太とハ齊藤義龍ふ仕へ山城入道道三を斬て
首を取ものゝ義龍卒去のち龍興の代よいとり野木
治左衛門と權を争いくるゞ久日両人爐邊ふ坐ハ小牧
爐中にさ〜入く火とかさ起を処と野木上ふのりうふ小牧
と斬小牧短刀と抜あげさふよ野木をち〜く両臣立處に
死を両臣死てのち龍興遂よ信長ふ亡さると武將
感状記よ見てたり
信長ハ九月三日ふ京を立く江州守山まで下向あ〜翌日間谷

より八風峠を越山傳ひよ清洲まで十七里の行程を一日の
うちよ歸着あり
守山驛より蒲生郡弓削村よりの山上よりうそれより
犬上郡黄蘗を過ぎバ八風峠なり峠を下る伊勢朝明郡
切畑なり此道千草越の北にあるより險峻ち千草越に
ぞうとい
途中の危難留守中の異變さぐ〳〵ぶ〳〵無事ふ下向あり
〳〵る高運のるど人力よ及ざるのあるべし加之上洛あり
将軍の御所よ御禮ゆされるのちい武威まる〳〵ちんふして
草木もるびくだりふりけるにより此勢ふ濃州へ乱入し數
年の鬱憤を散ぐんと思案あり〳〵いども已前よりて鹿忽ふ

軍馬と發しがく見合をのみうちよ永禄四年もくれて五年
よ形りふそり信長頻りよ美濃を討んとを工夫なし〳〵のいるふ
敵地の内洲股邊よ砦と構へ人數ぞ籠置ふれを足溜ち〳〵て彼
地を追こよ切取バ然べ〳〵んと思ひ定めらを誰ら彼処よ至りく
砦ぞ築こ得べきやり〳〵此砦事故ふく成就ら〳〵なバ即其
城主とあるべ〳〵と仰きられ〳〵よ林佐渡守承ろり此ち難
儀の御諚ら味方の小勢と敵地ふ残し置を前後り大河
あり敵り〳〵急よ砦よ寄来バ何とそ救の兵を遣とられひべき
やそれも平常の時ら〳〵バ曲くも加勢を出さるべ〳〵大雨ふり
たぐぎ木曽洲股の大河満水の時いうまぜん眼前ふ味方を棄
殺をべ〳〵此義よく〳〵御思案あって可然とぞ諫めける

洲股砦普請のこと織田家譜ニ永禄五年五月のことハ
然るに太閤記に永禄九年九月の事とハ依て豊臣家譜
も又九年のことハ今案ニ龍興乃信長ニ降る永禄七年八月
のことなれば洲股の砦普請永禄五年と以て是とハ九の字
五の字字形似るより終に誤るに至るなるべし
信長笑て左程の事と恐れて人の國を切取計義のなるべきや
何なる洪水ありとも敵の砦へ寄ると聞ば我自身馳行て救ふ
べしと宣ひもてそぬよ木下藤吉郎進て出我君の御計策圖ニ
當りて覺えい美濃を切従へらるんニ洲股邊に足溜となる
べき砦なくていかゝも叶ひ難るべし尤たゞの軍兵と敵
地ニ残し置ほとんと危きニ似るいへども命い義に依て輕

しとやい勇士の本意なるべし敵大軍なればとて三日や
五日悠えられざるべい有べしば何なる洪水なりとも三日
のうちなれば浪えてなるこの砦ハ御加勢の間ニ合ぬとい
ひまじ仮ふも一城の主となりて敵を引受三日四日の籠城の
なるべきといふとあるべしなれば又運ニ叶ひ敵地を切取ひとぐ
濃州軍の先鋒第一の功と云べし物ハ始終のなることいとゝ洲
股の砦ハ濃州軍の手始なれば此義尤然るべしと勧め奉るニ
より織田殿大ニ悦喜まし給ひ謀士の異見も左様なるべし我
籌策ひなしなるべし誰が為ニ此事と奉行して普請成就か
さしむべきぞと座中を急度見廻しなるニ柴田佐久間も
そしめい林が諫を尤とおもひ居るべしとも今又木下が

拒く危ふきこと成勸め奉るに惡くんども砦より彼が手
よ成就しなば木下急よ一城の主となり那んそれハ増く
嫉るべし木下ゲヤ請ざる内よ請取く彼が手を明をん
ものとおもひ返し佐久間信盛柴田よそ會釋し進
く出洲股の砦某謹く承とうけぬべしとやにより信長大よ
喜びあひ誠よ太義の役かぐ汝是を司ごしば莫大の忠
功なるべしと大よ稱美まし凡人數何ほど日數ハ若干
ふく成就をべきぞと尋ねあるよ信盛申けるやう普請の
人夫ハ五千成る兵士を三千日數ハ廿日餘りとやり信長きと
めし左もあるべし敵の妨げを防ぐ為よ兵士ハ今少し多く
率しく越度ふき樣ふ下知すべしと命ぜらる爰よおいく

佐久間信盛五千の人夫をもうくあひ清洲領の山ふ入材木
あまさ切出しそれより人夫手勢とくりふ洲の股よ至り三千
餘騎を敵と防ぐ備とをして外よ屯し五千の人夫ハ仮屋を
かけく内ふ住し晝夜をいとハず出精して普請を急がを信盛
八方ふ心を配りて下知しけり齋藤家の侍共この躰を見く
扨を信長大河を隔てく度くの出陣叶ひ難き故足溜りの
ためよ砦を構へんと計るるものるべし彼邊よ一城を築を
てハ味方の難義あり早く追散をとて牧村牛之助長井
隼人同飛騨守一万餘人の勢よて態と夜よ紛れとく押寄
くり佐久間を廿日餘りふ砦成就ふさしめんと受合しと
なれど夜とをいとゞ普請をいとゞせ今宵ハ既よ三日め

かゝり人夫五千餘人息をも續ぎ働さゝるゝどうちや
大よ勞をてうされども佐久間が下知嚴しければ是非
形く出精し夜仕事をする居ける處へ敵一萬餘人と
三手にさけく正面より長井飛驒守四千余騎にて押
寄関を作り鉄炮を打うけ攻めゝる佐久間ゆゆく期しゝる
を形もがゝしも動ぐば三千餘騎を真丸よ備へそ手痛
く防ぎ戦へで長井忽打負散くゝ敗走を信盛これを
見く怯し返せと勝よ乗て追掛行處を見すまし時こそ
よけもといふまゝに長井隼人三千餘騎牧村牛之助三千
餘騎信盛が後へ廻りく仮家を目あてふ鉄炮を打こゝ
攻立ゝもば普請かゝりの人夫ども肝魂も身ふそ沢

前途を失ひうろ〳〵騒ぎ川を渡りく逃ぐやと舟を
爭ひ筏をくゝり弥ぐうへよこゝあふどふ水よ溺るゝ
ものも多うりけり矧細工道具を打棄材木を損きく
こゝい數をもゝば信盛正面の敵を防ぎ氣色ぐふる処よ
此奇兵よ不意をうゝれ士卒をゝ引返しく後の敵ゝ當
らんとゝ長井飛驒守おめいく駈寄さゝ信盛これを
追拂ちんとをれで左右よゝ長井隼人牧村牛之助両を
作ゝく揉立さゝ寄る敵を目よのまる一萬餘騎防ぐ
味方いとづゝふ三千余騎もゝも不知案内のをもぐもと
齊藤方へ大勢よてもゝを案内者ゝり爰のはまり彼處
の切處よ走り廻り駈ふやまされ佐久間が勢ども心を

やらけふてや是ども夜中といひ方角を失ひ散〻に打
まけ川邊をさして引退く敵勝に乗て追かけるを
より信盛も今は是迄なりと思ひ切人夫を助くんため
小高き處に踏止まり命をかぎりに防ぎたるかゝ長井
飛驒守思慮深き侍なるとゝ味方十分の勝利を得さう
逃るものを追ぜはるゝ川ようあるさに加勢の兵もある
屬こさ拔くその上夜中なり追捨ふるゝ引歸さるゝ
とて人數を引まとひ普請小屋を打潰し石材木を燒
失ひ心地よくとく引退く佐久間十死を出く一生を得
心地ゼ〻かども人夫を多く損じ材木燒たれば直に
普請に掛るとも一先引退て再び普請の用意

もとゝおりの処に川よりあるさに清洲より兼て二千
の兵士を加勢のゝめふ置ゝ引逃行人夫に味方敗軍
乃よ戎間無二無三に押出しかどもあまりに人夫等
ぐあくさくさてさて逃る足の四度路ふるふ妨げられ
兎角するうちに信盛戰ひまけ美濃方の軍勢い引
退さゝ跡なれば詮方なく引ゝ面目ふげうあの
由を言上したりけり

長井牧村の人數の配り様即皇朝從上用ひ来る
進放待乃法と知べし

柴田勝家信盛に代りて砦を築く事
并日根野備中守兄弟勇戰の事

佐久間右衛門尉信盛請合し砦の普請成就をば然も
人夫兵士を失ひ石材木の損亡等勿〻容易ならず
孫が自分ようもつれを恥く罪を請籠居きんとせされ
ども信長これを咎めもせず信盛を召出され洲股の敗
軍全く汝が武勇の薄よりぶ此程晝夜の心勞察し
おろ〳〵めもに太義ことを救ん為ふ遣ち置ふ
二千の兵士の油斷〳〵大事の手に合ざるこを返こも
越度ふと但斯てを要害成就の期あるべうぶ如何して
砦を築くべきやと再度評定ふ及けもどを佐久間さへ
仕損じる跡こたきうい我代ゑて功を立んとおりふべこと
いづもも口を閉く音もせず柴田權六ふ〻此度い

某勤めやべ〳〵とや出しらば信長大よ悦びいうどて成就
ふもべきやと問ゑ柴田人夫三千ふく廿日を限り普請
成就仕べ〳〵とや信長宣ふ樣普請ハさる事なれども防
禦の手當を何とうするとあり〳〵時勝家別う工夫も
いとぶ一命を彼所よ捨ぬんより外なす〳〵と聲を放ちて
やけっにより信長のこまひ々るい佐久間ゞ三千余騎ふく
防ぎ〳〵敵ふり此度を旗本の軍兵まで加勢こ〳〵て
差遣ぶべ〳〵と有ゑるとも柴田承ち多くもまし〳〵ぬこ
御勢を引分く敵地よ至らば御旗本空虛ふりぶべし
依く三千の兵まて運と天よ任せそ防ぎぶべ〳〵とや沢木下
藤吉郎何樣柴田殿の仰をこ〳〵ぬ形く存ぶ御勢をう分

ゑんとなを然るべくんずん然るども砦を築く日數多くゆゑに困勞強く彼り防戰の勢よりはるかにゆゑ殊よ木を切出しゆゑ自由を得どゆゑ間此方ふく荒く切組ちく彼地よりも行五七日の内ふ組立ゆくゑ容易く出來しゆゑとゆゑ柴田實りとおりどを木下が助言により此事成就せど弥木下我等を侮るべしと偏執の心よりを藤吉郎が詞を用ひど何條さるこのゆゑさその地を遠く隔て切組ちどきば間違多く却く隙入るゑ只向ふよ渡りて働くべし敵あ我ろしとおりふ心より片時も早く成就をしめ本土ふ歸らんとく怠慢ふく出精をべき彼りとゑより木下も重祢ていくゑ柴田ハ人夫を

め寄ゆゑ材木を伐出さセくるよ手近き良材ハ佐久間大戸伐取しこちふい惡木ともいくゑ切いくゑ

くづりよ二日小四五百本を集め筏くるして洲股乃北方より押渡し兵士三千餘人先達く川を渡り備へを立て警固ぜり大垣城中の輩是を見て急ぎ井の口へ使を發して注進を

井口とゑは美濃國厚見郡ふく後よ岐阜とゆふ此時齋藤治部大輔龍興の居城ふり洲股より北東よ當り大垣を洲股の西二里四丁あり

齋藤家の諸侍この由を聞く嘲り笑ひ信長を良將と世よ稱ゑしこも如斯勞して功あるこゑ幾度もく

猶懲りざるなんぞと近比愚昧の至とゝゞ〜十分砦乃
普請出来して後軍兵を發し一時責ふこれを奪ふべし
と各笑壺に入く伺ひ居る柴田を三千余騎と三手よ
分ち一手千人をまと二手よ分五百人つゝ鉄炮を備へ晝夜
よ代りて敵を防ぐを非番の兵士を普請よかり少時も
油断なく出精せゝむ然るふ齋藤方の間者この様子を
見届け速よ訴えゝるとば井口の諸侍さゝゝバ打立ると
用意すると日根野備中守押とゞめ麁忽なる人この
軍なてや敵以前よこうゞ又斯の如くなるこふふ如何
彩る奇謀を設けゝも知べゝゞ猥りよ押寄ハ敗軍乃
元なるゝ〜よ〜又深き籌策ふゝゝを再度来りて普

請をふをゝの定めて勇剛無双の者ぞんそれを討ん
ゝを味方も又若干こゝふべゝ能く落付敵の容子を
考へその透間を見合せ押寄追散さべゝと中によう
諸士此義よ従ひそれゝゝう密ゝ消息を窺ふよゝゝて
前日の兵士等ゝゝ事かゝゝゝう人數配り備ゞて晝夜を代
ゝ兵器乃かまへ万端嚴重なりと告ゝるゝ我ゝ備中守れ
ゞゝて楚忽なせ様ゝと言つゝゝふ押寄てゝ勝を
取を最難ゝ某一ゝの謀あり今宵夜ふけゝ味方一万
餘人を三手にゝけ二手ハ川の上下堤の下よう押廻ゝ敵
の船ども伐切流ゝさて普請場の後乃方よゝ打て掛らば
人夫ゝゝも驚き騒ゝ周章すべゝ扨正面よう向ふ味方を

爰かく三手ふさがれ敵の三處の備へを攻へ〳〵但敵を打破るなりと専とあをぎらんとそ敵戎遠く逃をぬぎき為とおりふべ〳〵左右の奇兵ハ我等兄弟受取べ〳〵と定めけるとて諸將尤と一同〳〵長井飛驒守同隼人牧村牛之助三人六千余騎を三ツに分けて日根野備中守同弥次右衛門二千余騎これも二ツに分けて時刻を待ける比を五月の末かく短夜のなやふけて寅の刻ほを及ひけるころ打寄〳〵ぬぎも柴田ゑ備油断あけとハいちとも騒ぐ態と静り居るうけとて齋藤方大勢をたのみ思慮ふく進こよりをる処を勝家近くと引寄相圖の鉄炮一くるちをぐくや否三方より搆へ置る鉄炮を一度

よ切く放けるの玉乃飛を雨あるとよりも繁く其ひぎき雷霆よりもとげ〳〵れバ齋藤方の軍兵色めき立て見へけるを勝家さもよ我あ〳〵めいぐ〳〵一當あて〳〵切崩さんと馬を馳出し〳〵切く廻る美濃勢元より大勢をたのム軍ふ精戎入ざれい右往左往よ散乱を勝家まもく勢を得以後の懲しめよ手柄のほどを思ひ知をんと突伏切伏ふ〳〵くるるぐふ齋藤方六千餘騎柴田ゑ千五百余騎よあけ立ちと立足も形く敗走ハ日根野兄弟ハ川下より堤よ添く廻りけるよ鉄炮の音関の聲を聞く正面の味方くや軍を始しぞすとや續けといめまふ岸よ繁ぐ〳〵小舟筏を切流し〳〵兄弟左右よりれ普請小屋の両方より関を作

あらく寄しかば人夫ども大に驚き舟ふのうて逃もとん
と川邊に下り立探をども一艘も見えざりしかば然ハ
筏よといへども是まで切流しつるこゝろれば人夫ども
仰天しきあを如何せんと狼狽をして勝家正面
の敵を切拂ひ後陣の敵ふ向ゞやとり引返を処へ日根野
兄弟右左より攻寄中に取籠あまたまどと戦ふこう勝
家が勢三千余騎すでふ美濃勢に渡り合く勞をして上
乃こゝいひ日根野兄弟が二千余騎ハ新手にして鋭氣
をるゞくしをの勝家もそのまゝて見へける処へ敗軍
の美濃勢取くく返し前後より揉立しかば鬼とよばれし
勝家も討死と覺悟し死をの狂ひふ切て廻る是ハ佐久間

う敗北をく歸りし後といひ只命を捨く防ぐといひつる
詞を恥てふり勝家が太刀先に美濃勢多く討をしら
ども大勢なをば入替くく責立るゝどに勝家すでに
危ふく見えく処へ坂井右近池田勝三郎一千余騎にて
川をとをし人夫等を引退を齋藤勢に突くかる新手
ふるのこ形くばいづをも聞ふる勇士なをば勝ろこう
たる美濃勢も四度路ふりくく敗北を坂井池田虎口を
のがれて息繼居こう勝家鬱憤やまずいかる面もちにて
坂井池田に向ひ某が勢勞をていへども美濃勢の鋒先
まこ恐るをたくを人夫等を御渡しへ速に普請
を取かくりやうべしと云々坂井池田種々いさめ聊の

恥辱を堪忍してまづ引返しの屋〜と異見なし
無理引さてかへりける
繪本太閤記は森池田兩人勝家を救ふと記せ然ども流布本皆坂井右近とす

重修眞書太閤記二編巻之七 終

重修眞書太閤記二編巻之八

信長重臣〜砦を築く評議の事
并秀吉智計殘なく砦成就乃事

柴田勝家洲股砦の普請を請合ひ佐久間を代りて彼處
へ到り人夫を勵まし作事殘急ぎけるうその功未成る
うち敵の為に寄られ柴田防戰手を碎き一旦敵を追
散し頗勝利を得しも日根野兄弟が奇兵の船
筏を切流され多くの材木を失ひ兵士を討たれ
柴田無念骨髓に通り今は是迄ぞ清洲にて命を限
りに防がんといひつる詞もろかいざや快く討死

せんとのと思切〻を坂井右近池田勝三郎川を渡して日根野兄弟を駈破り柴田を救ふ〻共ゑ清洲へ引返し軍の始末伐言上仕る信長かゝてより柴田が戰ひ破きるゝば必ず切死ゑ死んと伐機遣〻たりとれ〻かゞ坂井池田を加勢ふ出され〻遠慮のほどゑ有ゞと〻れ柴田清洲ゑ歸りけるゞ信長少〻も咎ゑ〻ば却て柴田が戰功を賞せらる但人夫両度の敗走ゑ肝を潰し最早洲股へ行んとふものゝ〻斯くハ思付らる計策むな〻くもり形んとの残念さふ又く評定ありけるどゝ佐久間柴田の両將さふ〻得ざる普請ゑり誰ハ我と望出ん諸老臣一同ゑ口を閉たる処ゑ木下藤吉郎

進ゝ出御老中乃佐久間柴田殿の御手ゑ及びかゝ〻義を某承とゝく見やさざやと存ずるも近比烏乎の至ゑゆゝども聊思ひ寄たる子細のゆゝハ某罷向く普請仕べゝと望やゝ仕ゑより信長これを許〻ゆひさてその手段いふふと尋ねのふゑ藤吉郎やけるゝ敵地ふ城を築くふ味方の人夫を用ひや事損多く利少〻又二千三千の兵ゑ〻數日ゝれを守り大敵を防ぐんと又たゝみはゞ難義るてゆ然い此方の人夫一人も用ひやすゞ兵士一人も差遣不申敵地の者ふ敵を押えさせ敵地の人夫を以く普請仕りゆべ〻と云ゑより信長まゝ〻驚きゑひその謀を いふ形るとゝやと尋ゑふゑ木下やけるハ這邊ふ土豪

あり又偷盗穿窬を業とするものも精兵あり篠木
柏井科野秦川小幡守山根上等よ散在〳〵有べし
これ等を撰び集めその隊伍を分らて彼砦ふ置て敵
を防ぐせやべ〳〵と云により藤吉郎を〳〵其名字を
記さ〳〵むるよ殆千二百餘人ふ及びその中ゑて抜羣の
者ゑ蜂須賀小六同又十郎稲田大炊助青山新七同
小助河口久助長江半之丞加治田隼人日比野六大夫
松原内匠等あり之ゑ等を隊長と為〳〵騎歩凡五六千
人よ及ぶを二番とる〳〵大将ふ参りぬとゑものゑ
藤吉郎向ふり向ふ由望やくるにより即藤吉郎を
大将となされくり

されば永禄五年水下藤吉郎廿七歳の時ふ〳〵て蜂須賀
小六正勝卅七歳ゑ〳〵めて水下の隊下よ列ぎ〳〵時ゑ
普請い七日の内小成就ゑ〳〵め竹木石等まぐ味方の
ものゑ用ひど人夫い千餘人ふ〳〵事たるべ〳〵兵士ゑ
某ゲ手勢の外一人も御加勢よ及びいたづと言上〳〵る
ゑぞ柴田佐久間ゲ五六千の人夫ふて廿日餘りゑやふい
雲泥の相違ふりけるゆゑ衆人もいぶ〳〵思い信長も
覺束ぬ〳〵思〳〵めせ共いまぐ不思議の大功を立〳〵
水下ゲとゑもバ様あるべ〳〵と思案な〳〵ゑひ所望の
まゝに許させゑゑ嫉妬偏執の輩さ陰ぐ讒言をる〳〵
りといへども信長用ひゑもゑ水下ゲ計策を待居らと

こゝ叔も藤吉郎をかくより蜂須賀父子をそゝめ
稲田加治田を織田家へ仕官せゝめんと思ひたゝゝを
形ばかり篠木柏井のその共ゝ今宵のうちゝ材木竹石を
洲股へ運び集ゝと觸ゝたゝゝ荒い豪強の者ども六千
餘人只一時ゝ馳集り稲葉山瑞龍寺山多藝山等より
良材あまた擇切く五六百餘を洲股川の東へ運送して
山の如くゝ積上ゝたゝゝ清洲の領知あり木下藤吉郎
五百餘人の兵士を從へ千餘人の夫どもをゝ来り繪圖を
出ゝ普請乃次第を割ゝ土臺石垣塀矢倉一切く
ゝ組ゝけて切組せゝれば大工石工その意を得卯の刻より
酉の刻までゝけるゝゝ三四日ゝて荒增木拵

以下出來上ゝたゝれい藤吉郎職人等を諭ゝ佐久間
柴田い敵地ゝあること廿日餘ゝ積りゝと味方の地ゝく恐
怖の意あく組立さゝる間七日の内ゝ仕上ゝ上ゝその上
汝等ゞ妻子眷屬清洲ゝあるく織田殿の御恩を蒙る
ゝの形り忠誠ゝ盡ゝて勤めるべ不時乃賞あるべ
怠るゝれい罰あるべゝと丁寧ゝ教訓ゝたゝゝ
よく納得ゝて面くの業をゝげゝ程ゝ
砦の拵大形出來ゝけゝば去い洲股ゝ渡り土臺を
居ゝやゝてまづ幅一丈五尺深さ一丈餘の堀をゝをその
土を築上ゝ塀の臺ゝこの經營容易乃事なゝ
蜂須賀黨を召集めけるゝ都合六千餘人我劣らじゝ

集るその中より一千二百余人を勝つて武頭とし其の内よりまた小将を撰出し弓鉄炮を組こけて防禦の用意を示し合せ備を立て敵をまつむその威風凛々として陣立嚴重なれば竹ぐをたてつらね押寄せ爰こそとおりふ透間もなく外をば蜂須賀よ防がせ内をば木下人夫を下知し精神戮竭し晝夜といそがせ働くなるわざふ三日の内よ堀一重といはり上うり扨四日目よ堀上うる土を以て築立芝を植臺を居るふ切こそ〳〵たる石を以て高さ三尺の石垣を築ぜくるふ一晝夜ゑ〳〵築上うり佐久間柴田乃時と違ひ敵を防ぐ手立よけまばかをれげも形く仕上うり次の日一日い休息ふさうめ

その次乃日ふ至り柱を立させ門〳〵櫓くその地形ふ應じく組あるべたをば請合の日積り少しも違ざ七日よりて一城の築立成就して くうう

小瀬本よい七月五日大小の長屋十ヶ處櫓十ヶ處塀二千間柵木五万本八月廿日以前よ仕立ゆへと作事奉行よ仰出さるゝよ日限よりくやく出来せ〳〵とうも但五万本の柵木ハ一間十二本打ゑ〳〵く四千百六十六間ふ用ゆし然らば二千間の塀乃外よ二重柵の料とあるをうう

蜂須賀稲田等戰功の事

并齊藤勢兩度敗軍乃事

此時齊藤方よりを以前兩度まで織田の軍勢を追散〳〵

石材木を奪取く悦び勇みこりゝや織田家ゆく砦を築く沙汰あるべしと思ひ居〳〵ふ木下藤吉郎人夫を率ひ来り三日ゞ間よ堀をかけ塀をかけるを見て扨く兩度の不覺ふ懲もなき無益の事成るとゝのゑ此度を存分よ骨を折を竹木多く集り事十分に有り〳〵比例乃如く打く出追ちら〳〵分捕をべ〳〵と肩酢を飲く居〳〵りけるよ

繪本よ美濃勢蜂須賀ろ調略をゝ毎度敗軍〳〵その内ふ六月下旬大雨によりて兩方互ふ軍をろ〳〵休息ゼ〳〵由を注〳〵藤吉郎諸卒ふ櫂をたゝせて泥土の中を自由よ走廻らをその内よ竹木を運び集め夜の内よ合印を以く貫柱と組合せ轄鎹をもて堅め板と白紙をて張立画工よ矢狭間鉄炮穴を畫ゝ夜明ゝ比ゝや成就〳〵内よハ旗さ〳〵のと立るゝべて敵をゆち〳〵と注をゝ

ゝつゝ四日と經ゝれハ石垣芝土手柱立まゝ大形成就をにより美濃勢大ふ驚ゝあきれこハいゝふ何の間よ斯いちゝゝ築立〳〵ゝと仰天するゝの夥〳〵早く押寄踏潰とべ〳〵と即時ふ出馬の用意をゝ日根野長井牧村ゞ輩打のぞんく砦の様を伺ゝふ先度ゝ似を大勢とゝえ然も所くよ備城立たゝば麁忽の合戰然るべゝ〳〵〳〵〳〵勢の程ハ五六千によも過ぬゝ味方ふ競くハ半分ゝさのゝゝ恐るゝとゝハ但敵よ五段ゝ備ゝ攻るゝ五段よ備

ふべくとて一万余人と二千餘人とで五隊と成て日根野兄弟長井隼人同飛驒守牧村牛之助を大将となして洲股へ水下が間者立歸り美濃勢一万人とや出馬の由と告しらば藤吉郎蜂須賀加治田青山日比野松原を呼集め敵程なく寄べきなれども面々一人の功を立んとおもふまゝふうれ首を取んとおもふべうべく只敵を追拂ひ砦の成就を味方の勝利と定むべきなめ鉄炮もて能くあらひ透を伺い騎馬を入べく駈たてべきなめ槍を入るべきを形く一騎打の勝負をふるもべうべく兼く謀ふ奇兵の援を以て敵を追むべくもばいふも味方をたゞひく敵を勞もとめよかくて二三日を過さゞ砦全く成就すべく

砦成就せは是各〻の大功なりと理あるとめよや含めうば蜂須賀加治田等その意を得く寄手おそくと待懸たり齋藤方一万餘人五手ふ分とて押寄日根野ハ蜂須賀が手を責んとく舍弟弥次右衛門を稲田が備ふ向ひ長井ハ青山牧村ハ日比野と五段一同ふ攻めを開を作るべ木下が兵一千餘人の内歩行立三百人ふ鉄炮をとりこせ備の真先ふ立五百人を太く逞ゆくき馬を撰く騎をその間ふ鎗長刀の歩卒を組合くう是ハ寄手近よりて急ふ駈破らんとせばまづ三百挺の鉄炮を切く放く敵打立らふくためらくん處を見とゞめく五百の騎馬ふく駈入竪横ふ蹴ちくその透間ふくふ鎗長刀の歩卒馳入て突立んくめの支度之

案の如く齊藤方大勢なれども蜂須賀加治田ふ駈るや
まさしく立足も形く敗走とたちまちと齊藤方の大将もち
いげも剛勇の侍なれどづらの勢ろ駈られて見苦き
様やかくやくと日根野兄弟ふと止まて獅子奮迅乃
威を振へば長井牧村も同くく引返くく切てめる蜂須賀
黨を此合戰の勝負こそ面くの安否なれと軍を大事ふ
おりひ木下が號令を守りて一騎放もの戰をるべ隊伍
の繰練一致して進も退も一身の如くありくとて美濃勢
勇氣とげくく共牛角の勢まて亂も合くらばいつ果べく
とも見へざる処ふ齊藤方の兵士俄ふ色めき立敵大垣を
襲ふくく合戰急なり爰を捨くく後詰をせよやと呼ばりく

周章ばこれい木下が謀あくく齊藤勢今日墨股へ寄ると
聞や否蜂須賀又十郎青山小助両人ろ一千余人の兵士と
授け密ふ多藝山の陰よりくく置日根野長井等が井戸
打立て墨股ふ攻寄り戰ひ半ばる比多藝山を出大垣ふ向く
急ふ攻立ようと示くく合せくが故なり又十郎小助元より
案内者なれば岩の谷道谷の細道嫌ひなくく山路を出て城
の搦手へ押寄嚴しく責立々々ふより城中おりいよくぬ事
なれば防ぐ手當を失ひ追く墨股の陣中へ告げふより日根
野兄弟をとくめ長井牧村等ともかくもまづ引返くく城を
取巻くく寄手を追拂へくとて人數を引上日根野兄弟後狩
して退けるを蜂須賀稲田下知くく追懸させば勝鬨を

あげ〳〵備を立固め勇こ進んく居〳〵る齊藤方の軍勢日根野長井牧村い大垣をちら〳〵揉ふりん〳〵引返し後詰をせんと云〳〵めさくる流布本或い稲葉山と襲ふといひ又い大垣なりと云稲葉山い龍興の居城大垣い竹腰攝津守重吉の城なり重吉の父七郎重繩入道道鎮い齋藤道三幕下なる弘治二年四月道三と共ゝ討死したり重吉の子攝津守重次い武井の家を嗣く武井氏を冒し重次乃姉ゝ金森の一族原谷正安といふものを配して竹腰二郎兵衛と名乗せその子竹腰次郎右衛門重時その子助九郎正時その子山城守正信なりといふ墨股より大垣まで二里四町之

蜂須賀又十郎青山小助い後詰の勢乃来るを見て早くに城を巻ぐ〳〵間道を經く墨股へ引返ス日根野長井牧村等大垣ゝ馳付くるに敵一人もあらざればよくも手ぎわくたゞめ〳〵もてなりかゝる計策をなすものと尋常の軍を那〳〵勝を取でさいくるもの〳〵無念なれども井口へ引返し再び合戰の次第を評定〳〵て後の事よと言いまづ人馬の息を休め銘くの意見を問ゝ長井飛驒守進く出く清洲勢兩度の敗軍ゝ懲〳〵ゝ小ゝ今度ゝ於くいかゞの事をなス乃こそ苦なり然共尾州勢大河を渡りて敵國にあることなれば心中ゝ恐怖を懷きあるべ〳〵その上案内い不知万事心の儘なるまゝ今日の合戰味方ともゝ引取つゝ尾州方ゆく

勝軍せ〳〵と地りひろう終日の勞ゐて今宵ハ打解く休息
し備嚴重ふる所〳〵さくその処へ一夜打して睡を覺をし
とゆとより衆議たと一決し夜討の手分をなし者ども
ども墨股あくい木下藤吉郎蜂須賀黨の武略を賞し
扨今日敵本意を遂ぶして退きぬるとバ必定今宵夜打ゐ
來るべ〳〵その備ゆゐせよやと五ケ處の備ゐ三百程づゝ殘
し置く相守らをその餘の逞兵とゞ〳〵く伏勢と成し美
濃衆寄來らば追取籠く討破らんと待掛ども齋藤方
ゐてい宵の間ゐ兵粮を支度し敵ゐ尾州生育ゐて不知
案内の輩と推量りたるとバ闇夜を幸ふ押寄方角を踏迷
とせく討捕んと物馴ども兵士三千だゝを引率し五人の

大將ども打出ども態と松明を照さゞ密ゐ忍んく織田
方の備ゐ近付伺ゐ案の如く晝の戰ふ疲ゐと見へて
陣〳〵怠りげゐく何の用心も無き躰ゐ成ば仕濟し
討入と一度ゐ鬨を發し突入るふ纔ども雜兵だゝ爰彼處ふ
居眠居く物の用に立べき輩一人も見えゞ夜討の兵士おゐ
のとに心迷ひ如何ふる方便ゐやと不審こげる処ども誰打し
ども知ぞ鉄炮の音響とゞ〳〵く一手の伏兵討て出餘を
ゐとゞ〳〵攻寄ども寄手の面く扨ハ用心せ〳〵ぞ此處ゐ
てゝ足立あ〳〵く引退く廣き處ゐて勝負を決せんと
備を立直をば又一手の伏兵起りて打くゐる寄手いゐく
驚き急ふ引んとする時左右ども二備の兵士あゝ〳〵ふ爰

かゝこたまりく小立ふさがりさゝいめ引つめ射る程
よ美濃勢却く度と失ひうろ〻廻るその処と討り切つ
不知案内とおもひの外織田方の兵士の夜中乃働面と
向ん様も那〻是ハ元より蜂須賀黨ふく當國案内の
ものゝ知ざりける齊藤方の兵どもあてさらく〻理と
日根野兄弟も案ふ相違せ〻尾州勢の振舞をうゝ驚き
かり疑ひ人数を引上んとあをれども土地よるしる敵方
の闇夜乃掛引自由なるハ夜打の士卒多く討と疵と蒙る
もの数ちゞ這この躰すて井口さ〻て引退く

重修眞書太閤記二編巻之八終

重修眞書太閤記二編巻之九

秀吉智謀敵兵を破る事
并信長藤吉郎ふ感狀を賜事

去程よ齊藤家の諸士等尾州勢ふ砦を築うせまゝと
晝夜兩度まぐ押寄責々れども兩度共軍利あく兵士
餘多損亡をゝ容易らぬとにおひひ今五六日も過ゝば
砦成就をゝ海〻きものゝもあゝ彼處よ一城を築うせて
味方第一の患なり如何あゝとして只今の程ふ責潰さゞる
ハ〻ゝと種く智謀を廻らゝとへども此比齊藤家の
謀主と聞え〻竹中半兵衛重治子細ありて山林う引

籠りけるふ依く稲葉山よ軍師ふ〜西美濃の三人衆と呼る
伊賀伊賀守稲葉伊豫守氏家常陸介ハ元来齊藤家の
旗下ゑりといへども龍興愚ゑふ〜く士と應接とする道を失
ひ〜故何も龍興を憎く是ゞ差配と受るとゑ成喜ばゞ
伊賀伊賀守といふを田原藤太秀郷六代佐藤の杢頭
公季五代佐藤朝光の後ゑり朝光伊賀の國司たり〜ふ
依くその子ゑる伊賀と以て稱號とゑ稲葉伊豫守と
云い始彦六郎通朝後よ良通と改め入道して一徹といふ
此年四十七歳本巣郡輕海の城主と
唯道三以來恩顧の輩のゝさ〜ぶく軍慮ゑ心を碎き是非
よ押寄砦を責潰さんと評義よ及ぶ処ふ日根野備中守ゞ

いく〜敵〜を小勢ゑ〜く一城を築き一國を窺さんとふ
大事と抱え〜兵ゑり味方を自國ゑ〜て案内とゞ能
知〜ゑ我國と人よ取ら〜と抱ゑ外よ別の機遣ひ
ふけとゞ尋常の戰ふ取く味方七分の利ゑり今日の
大垣の變と聞て不慮よ戰と止〜と全く敵の欺くを
受〜なゞ〜餘りふ浅ゑる〜ゑ〜ゑ〜ゑ〜所詮今日ふ
於くハ味方心を一ゑよ〜ゑ勇氣を勵ゑ〜當敵を破ら
ざふ生く歸るまゞと誓ひを立て押寄面く國家の為
よ一命を抛ち粉骨碎身の軍忠と竭さんと思ゑ〜勝利を
得ざゞと云とあるべゞ〜ゞ早く用意ゑ致さるべゞと勵ゑ〜
ける故皆く此義然るべゞんと同心〜て新手の兵八千餘人

ゆく向ふべしと相定め大垣表にも手當をなし置其外後よ心掛ゐる様ゐ取計ひ今日といふ今日こそ砦を潰さでは止じと勇み進んで打立ち此時洲股よりて藤吉郎作事を見廻り今一日ゆもすれば普請大形出来そべしりとも心易し全く人夫等が出精ゆゑぞ但今日敵必寄来るべし敵寄るとも人夫等いやつく中間を如く少しも騒ぐ働くべしと中含めけり蜂須賀が許へ今日ハタ立催ふして北風さへ吹くいふ斯様ゐ計らひ力を勞せず敵を防ぐべしその上ふ敵いよく進み来らば諸卒櫂を用意して働きゆへと下知あり扨蜂須賀黨也こまりゆといふよりさやく儲るゆゑ小柴焼草を多く積立諸卒ども櫂を踏み待ちふその日巳刻過る比齋藤方八千餘騎よりて井口を打ち出洲股ゐ押来るゆと見るより蜂須賀黨うの柴焼草へ火を掛しわどふ北風ぐゑ〳〵井口勢の押来る途中の在家へ火移て餘烟敵の方へ吹ゆけるゆゑ比を六月炎暑の時節只さへ汗ハ面ゐ流ゐ眼を見上ん間も於き処へ柴草の烟覆ひ来ゐ熱さもあり〳〵炎ゐ咽び一足も進ぬ程なく夕立ゐ今少たり永井飛騨守大音ゐ今日ハ程なく夕立ゐ今少時さらへふば頓く涼しくなりぬべしその氣ゐ乗じて責掛るべしと下知しさらば息繼居けり普請の人夫ハ此間よいよく出精しけゐ作事の間ハ少も闕

ぞ思ふまゝ小修理しけり果して大雨降出し車軸を流す如くふく在家にうゝし火も濕り一陣の涼風吹起るやいなや齋藤勢はつゝこゝ望む鹽合よと大うゝ悦び涌ぐごとくに寄來るを蜂須賀小六出迎へ一交も戈戟戰ふく颯と引ゞ加治田隼人入替てこれも少時も らふて引退く齋藤方勝ほのりく八千餘人一手にてりく進く来る蜂須賀おりふ処へ敵を引付よつこそ兼て計ひ〜處あしと云ふに思ひもよらぬ六千餘人三方より打出散くふ掛立責けるゝば齋藤勢途を失ひ炎ハ地低く沼田の中まて雨ふる時い道もべりて歩行自由ならぬ軍勢はまづき倒ゝ進退難儀〜〜鎗を合を太刀を打合ふ

まぐも形く足を立かゝ〜処を蜂須賀黨をすべて橇を踏るゝの共ふく泥途深濘の嫌ひなく おりふ儘ふ駈廻り突くい切切てを突くるゝどふ齋藤方踏止りて戰ふゝの一人もなく何の仕出したる事も形きふ我先ゝと引退きけるゝば備を立直し〜再度掛らんと日根野永井心ざゝ〜ふゝもれども其日も既ふ夕暮ふ及び〜ゝどふ無念口惜さゝ云ざゝ形くゝとゝを止こゝを得ぞたるゝと井の口まで引たりけり蜂須賀黨を十分ふ敵を追散し能首多く打捕しかゝ悦び勇ゝて木下へ注進を

太閤記ゝを九月朔日北方の渡りより上ふ於く筏を組四日小牧山へ勢を集めらゝ五日の未明ふ小川の

川上より著陣し美濃路へ相越柵を付廻しける処へ井口勢八千余騎段々ふ押出し城普請を押えんとせしと
いへり偖秀吉より屬らるる番手の兵五百人都合其勢
三千人ありて然共扶持方ハ五千人の分米三千俵ワ〳〵
信長御勢を打入るゝ同廿四日井口より又押出しくるを
稲田諫めて味方を柵より外へ一人も出さず敵もまた
秀吉の心中をはかり其日ハ人數を引上さり然るふ稲田
今宵一夜打して敵の肝を取べしと云ひ打出首
十三人分捕あまたしてこれ歸しけるとこ此時の秀吉乃注
進状あり日付ハ九月廿五日充所ハ福富村井ふり信長
より恩賞そこ〳〵秀吉より持鎗持筒を賜ひ旗を許され

夜討のことのゆを米十石ひ〳〵被下稲田よハ御書と御筒
服を被下働さよるべき五人のその共へハ領地五十貫ひ〳〵
宛行ふこと
木下大ふ其軍功を賞し酒肴を送るべく士卒を勞ひ賞美
しきけりその上普請も今日既ふ成就をしるべ齋藤方の
ものども遠目ふ望むふ紙張の壁も白土を付調へしと
見えくいよく容易く政難く思ふしるべ篤と計略を
廻らして後ふこそ政潰さるべしと空しく評定り日暮
暮しくるまば此間に木下ゲ手配全く調ひ蜂須賀黨六千
餘人を二りよりとけ三千餘人ハ城中ふ招き入三千餘人ハ城
外ふ陣を取を嚴重り持固めくのち清洲へ言上ひ此時

織田殿ハ木下が七日の請合ゑて一城を築うんと言ーその覺束なさふ如何なる方便をうんと不審ぶ〳〵その日を待居ゐひ〳〵よとく〳〵出ふく人夫等悦び勇ゑて清洲へ參著をーゆゑ織田殿大ゑ驚くせゐい家中の諸士も一同ゑ肝を潰ー不思議ゐゑる藤吉郎が働さゑるゑと感稱を織田殿則約束のごとく木下を墨股の城主と成さし自筆の感狀を賜ゑゑゑ

今度欲洲股築城處以計略不日令成就敵屢亂妨盡追退之切首數級被送越條武功無比類追而恩賞可沙汰付者也

永禄五年六月廿一日　信長判

木下藤吉郎殿

その上弓鉄炮矢玉藥等まで相應ゑ運び入を兵粮まで追くり運送ある べさ由仰出さんーゆゑ藤吉郎面目身ゑあゑりてゑ見へたりゑる殊ゑ信長自筆の感狀これ始ゑ乞ゑ老臣諸士の等羨嫉むものありとゆへど佐久間柴田等さも作得ざる大功を立ー藤吉郎が智謀ゑ及ばぢる成以て口を閉く兎角やの色墨股ゑそハ藤吉郎蜂須賀稻田加治田等を呼近付近日織田殿當城ゑおゆーまゆべき由なゑばその節御目見あるべーまゆそれゑまぐの悦乃酒宴をゑとべーとく大ゑ饗應をゑー偖當時敵寄來る沙汰ぶーとゆへどを何時不意ゑ攻来らんも計難ー

用心を怠るべからずと防戦の手當嚴重ゑ備へ給うさもどと齊藤方ゑくい此四五日種〻評義ありしといへども良籌策も彩く延引しけるゞ長井飛驒守が謀ゑて この上ハ龍興の出馬をすゝめく戰ふべしとて一万餘人の著到を一千五百餘人引ゝけて墨股の砦ゑ向く合戰さを敵討く出ふばたゞ〻支く敗走さべし然い敵定めて勝ゑ乘て追来らんハ必定なりその時重地ゑ引入て八千五百餘人の兵士を八方ゑふせ置差狹く討バ一人も残らず打取べしその上ゑて城を乘取踏潰さべしとヤに より皆是議ゑ同ど夜乃中ゑ所〻に兵を配りて伏勢とゝふ夜明るれバ長井牧村兩人一千五百餘人の勢ゑて

墨股へ押寄て〻ゝ木下藤吉郎此由を見く防戦の評定をゝ〻けゝふ稲田大炊助敵の小勢なるゑ必定奇兵ゑて謀計あるべし麁忽に合戰さば敵の策ゑ落入ゞ〻某城外ゑ打く出これを防ぎヤべしと望〻るゑより藤吉郎感じていふを能推量之早くその術を以く勝利を得べしと許し〻れバ蜂須賀加治田稲田三人を大將ゑく砦より外へ打て出敵を待バ長井牧村ゑ一千五百餘人敵を誘引うんと軍を始うけ〻ゝども蜂須賀黨更ゑ動らざゝしバ長井牧村急ゑ下知しく一揉ゑと責掛りけゝとバ稲田が一手これを迎えて戰い〻ゝふ長井牧村何とゝ〻けん忽ゝ打負て引退く稲田ゑ兼て

思設し事故ありと追ひ静かと本陣へ引返さる長井
牧村為方あさふ取返し敵を怒らせつるを囲めんと
傍若無人く振舞しかども蜂須賀加治田の陣より鉄
炮の手練を勝りく五百餘人雨霰とうち掛させ早走
りよ名を得し馬乗三百餘人を撰くごつと叫て掛出
短兵急よ追打々ゑば齊藤方思ふはぶぞと裏崩し
けるを蜂須賀黨玉を込替く馬を進く撃かれば遂よ
齊藤勢一千五百餘人ばかりふなりて引退くさんども
蜂須賀黨も心得く長追をば手ごやく引返し々ゑい
長井が計策も虚しく暮よ及く力ゐく伏兵共も井口
へ引返す

蜂須賀稲田等織田殿よ拜謁の事
并木下藤吉郎墨股城所置乃事

信長美濃征伐の思慮を廻らし墨股う砦を築うん
こを命ぜらるしよ佐久間信盛此事を奉行し普請よ
かりつゝども齊藤方ふ妨げらるくその功成らず柴田
勝家その跡を請續ぐ再度是を奉行せしかども同じく
美濃衆よ追崩さる竹石材木を失ひ士卒を損ぜ斯てい
思寄し要害成就の期を知らず如何ともべきと案ず煩ひ
あるしよ木下藤吉郎ものゝふ七日の間よ築くべしと
受合く其日限違ゑば普請全く出来せし趣い既ふ言
上し自筆の御感状を賜ゑる其後齊藤勢と合戰し

勝利を得首數多清洲へ進上そうらば信長はなはだ
藤吉郎が軍功を賞せらるる要害の見分かたがた墨股へ
出馬あるべしとて五千餘騎を率して打出あふ藤吉郎
らるるを聞路次まぐるそうるく人數を出して警固をなし
城門の外うち敷皮をうせ藤吉郎御迎に出て畏居る
と信長さつと御覽ありけるが馬より下立さのひ木下
が手柄取せのひ汝が智謀今にたぐめざる事なるとども
今度の義ふ於くい抜群の働勿く賞せらるふ詞なり如何
あるべ神速なる大功成就ぜしぞや我今日快く當國
よ馬を出すと是併汝ら功なりと宣へば藤吉郎平伏く
ちを勿躰なき上意ありいは某ら微忠を只普請の仕る

兼ねて工夫仕り置たる通りに課行し迫よひ成就仕り
しい君の御威光の照を所と兵士等が粉骨を盡せし
故ありくいその兵士等の中ふ就く蜂須賀小六同又十郎
稲田大炊助松原内匠日比野六大夫青山新七同小助
加治田隼人等い万夫不當の勇士比類なき戦忠はとの
よい且今度のくふもいとば去年當國御出馬の砌も
此輩の方便により味方の危難を遁を又今川と御合
戦の時い江州加勢と號して味方の軍氣を裨けし兵士
どもよいくば君への忠勤すでふ三度よ及ひいあれ御前へ
召出され御賞美の上意をし下されひ樣願い奉ると
ありけるば信長聞召彼者共のくふ兼ねくより憑り

る者と聞つる兵士なり依て今度い面會すべく思召さるゝ渡御あり〳〵と宣ひ先入城ゆゑ所〻巡見の上普請の仕様防禦の備殘る処なく嚴重の至なり と感賞ありくのち此要害我所思すに満足せりゆくてを美濃國を并呑んと遠うべと悦びあひ偖彼輩ども此のゝ〳〵により藤吉郎ヤ次ぎて蜂須賀稲田加治田日比野青山松原以下大將分の兵士順〻ふ御前ゑ罷出けるに信長大音ふ其方共二兩年以前より木下が與力と〳〵忠戰を竭せ〳〵由疾より聞知處なり殊更今度當城修築の始より度〻の勲功そなれのこと〳〵此程夜討して能首數多打捕しと無双の忠義と云べし今より後藤吉郎ゞ

手ふ屬し當城を堅固ふ守りゆ〳〵恩賞ハ追〻沙汰し付らるべしと宣ひ當坐の賞として黄金若干を出し給ひそ〳〵ふ配當ありけるに蜂須賀黨いづれも大將直の褒詞を悦び満面ふ笑を含み感涙を流して退出と然して のち信長木下を召出され其方數度の勲功ありといへども いまだ十分の賞を行ふ事ハ所望あるハ何ぞふくも聞召屋し中出しゆへと仰らるゝハ藤吉郎承り臣ゝ忠を盡し功をとげむこと尋常のことハ何ぞいさゝかの功ありとてゝ〳〵に恩賞を望ゝ中べき且某御恩を蒙り既ふ高禄を領し又新ふ一城を預けさせのふと畏入く存ゆこの上何ごとを望ゝ奉るべき但某聊願ひ奉り度

このゆへ別義あるべし今少し黄金を下さるべしとのたまへ
ふより信長聞食我既に何事をもて請に依るべしとやう
はるべ黄金を與えんさて尤易しと宣ひ即若干の金
を賜ふ木下大に喜び又やう上ぐるい此六千餘人の逞兵勲
功い去ることなれども元來不敵の曲者共にて山賊強盗ハ
こそひとゑね親族の意ふ叛き地頭領主の命を犯しこれる
者ども少からず縁ゆ長く幕下に止め難く存ひ故黄金を賜
く放ち返さんと存付てハ然共此輩ふたゝび用ひやべき
時節ともゆへ格別の御恩を施されひ事大事ゝ前の小事にて
ひと言上をもにより信長この外感賞ありて蜂須賀黨千
二百餘人を止めらるゝ殘りハ盡く在所〳〵へ歸さるゝ

去ハ此この共時ふより折ふふゝ國〳〵の消息を注進せ
らるゝ木下居ゐ〳〵東國西國の動静を知ることを得ること
しと云ふ

濃州不破郡表左ハ河瀬多藝郡ゑ鷲見などいふ
この皆木下墨股の砦を築く時ゑ從ひ功を立しこの
ことゑ洪水乃爲ハ記録紛失ひ〳〵其事實を詳ゑ
惜べし

扨又信長墨股へ兵粮運送のこと仰出さるゝ木下や
けるゝ他國ハ軍馬を出しい時いその國乃兵粮を用ゆる
事ふゝゆへ別ゑ當城へ尾州の兵粮運送あるんを無益
よいとゝんゑ

孫子作戰の篇小善兵を用ゆるものを糧三〻び國より載ゆる器用と本國より取粮食を敵地より取と云意より副て

當城なてい當國の米穀をのつ〻籠城の兵粮と那〻ヤ〻で此段〻を御心安うるべし此次う言上仕るき〻のい戰國の儲米穀金錢と以て第一と仕る義なてゆへ〻も民を虐慾を專らと仕りゆい偏ふ盜賊の所行より似〻くい地頭〻うもの〻を平生の費を省き百姓の困窮せざる樣より能く心を用ふべくゆ古來より山よい炭薪の用をとり海より魚鹽の利を求めゆ法あり君乃御領知山多くゆへ一村より一木の貢を定め取ゆ

て〻民勞をぶして然も數百の良材を積べ〻その中より就て棟梁の用ふあつべきをの柱桶よりあとべきをの撰擇して儲へゆ〻べ修造の期う臨て求むる暇を省きゆべく惡木をば薪とふ〻ゆて〻べ年中の御得用るんとヤけるふより信長大より悅喜あひ即ち藤吉郎がヤ旨ふ任と〻一村一木の貢と行て〻セあひるとてその材て〻して岐阜築城の料より當て猶餘ア〻と以て安土の經營より用ひらる是も又木下が戰國の財を蓄ふる法ふりて〻りと後ゆ〻人も知て〻う

今小美濃尾張近江等の農民等が口碑う太閤鎌役斧役網役築役なのどいふことを傳へその外山役川

役野錢堤錢などいふものも共に一村一木なども
云法の殘るべし
扨信長洲股出馬の序ふ稻葉山よ押寄一合戰をべ
しとありけるを藤吉郎諫めくゝ中々るハこの城普請
成就してゆくゝどもいかゞ土地近隣の民歸伏をバそ
のゝゝゝゝゝ齊藤家の旗下ふ竹中半兵衛重治と云
ものあり此ものゝ山林よ閑居しく世を遁もうゝ似
たり是ハ龍興が行狀を見限りその事と知るとゝ
然ども龍興り行狀を改め敬ひ崇く招さるゝ必ず
再度これを補佐べく然る時ゝ君の御為大なる妨と
ゆべくいふりて此竹中を御味方とふくその上よて

彼西美濃三人衆をも御幕下ふ參向せくめゝぐ齊藤
家の謀臣を奪い枝葉を苅除るよ等く謀臣ふく枝
葉枯ゆくゝ齊藤家を打亡さんを利刀を以く腐木を
切よ等くくゆべく願くくゝ今暫く御見合ありて某が
注進仕ゆまゝ待をのふゝ信長實
りと感じ思召ゝ然バ汝よく當城を守りて敵の變
を伺ふゝくく若急速の事あくバ注進せよ早く加勢
成さくく越るべくと定めゝひ清洲よ歸城あり木下い
手勢の外よ一千二百の勇士を帥ひく籠城く此より
當國ゝ諸士をとらんと樣く工夫を廻らくる

重修眞書太閤記二編卷之九終

宮内省書陵部